

フランソワ・マラヴァルの神
秘詩についての紹介
François Malaval (1627-
1719)

小泉友美 KOIZUMI Tomomi



目次

フランソワ・マラヴァルの神秘詩	1
---------------------------	---

フランソワ・マラヴァルの神秘詩

フランソワ・マラヴァルの神秘詩 L'amour de son néant 神の虚無の愛

フランソワ・マラヴァル François Malaval は 1627 年に南フランス・マルセイユで生誕、同地で 92 歳で亡くなりました。神秘主義詩人として知られました。生後 9 カ月頃に事故で失明して、この幼少期の盲目による暗き体験 (ténèbres expérience) を通して、独自の闇の神秘 une ténèbre mystique 理論を創りあげていきました。失明しても近所の子ども達に読み聞かせをしてもらい、勉学に励み、神学を学んで、後に秘書に手助けをしてもらい、神秘主義詩やその他の創作に励みました。視覚障害によって生活と創作が制限されがちでしたが、Oraison (心の祈り) によって精神力を鍛えて、心で他者と会話する術を得る事が出来ました。ここでは、フランソワ・マラヴァルの一篇の神秘詩の翻訳を紹介します。

神秘主義の言語は、暗闇 obscurité,
輝き clarté として主に表現されます。

Témoigner à Dieu ma reconnaissance pour les ténèbres extérieurs dont il a couvert mes yeux presque dès le commencement de ma vie, je présente au monde des ténèbres qui lui font voir la lumière de Dieu. 私の幼少期より、ずっと闇に閉ざされた両眼を通して、神に感謝をします。私は闇に閉ざされた世界において神の光を見ます。

L'amour de son néant 神の虚無の愛の詩において、néant の言葉は果てしなく広い、心の休息地とされています。(Mon centre est le néant, c'est un vrai lieu de paix) また、この虚無は暗いイメージでは無く、光に満ち溢れさせた場所とされています。(Mon néant me tient lieu d'attrait et de lumière) 虚無を自ずに受け入れる事で、神に出会う事が出来るといいます。(Qu'en Dieu tout bien se trouve, et le néant en moi)

小泉友美 翻訳

L'amour de son néant

Mon centre est le néant, c'est un vrai lieu de paix.

l'imposture et l'erreur ne s'y trouve jamais.

Lorsque je ne veut rien, l'ennemi se retire,

il ne sait où me prendre, il ne sait que me dire.

Quand il veut raisonner, je ne l'écoute pas.
 Quand il flatte mes sens, je sais me tenir bas.
 Que ce néant est beau ! Qu'il est doux et tranquille.
 Ce néant me fait voir que je suis inutile, Que je n'ai rien de bon, et que je ne puis rien ;
 Que je n'ai de mon fonds ni force ni soutien ;
 Que tout mon être humain n'est qu'un flux d'inconstance.
 Ainsi Dieu paraît mieux mon unique assistance.
 C'est beaucoup de faveur qu'il me lance un regard.
 S'il ne me donne rien, le néant est ma part ; souvent de l'oraison toute l'heure est passée,
 Que je ne sens en moi ni désir ni pensée ;
 S'il m'en vient, c'est un trait de sa bénignité,
 Ainsi je vois sa grâce, et mon indignité.
 Lorsque je suis,
 stérile, une retraite entière .
 Mon néant me tient lieu d'attrait et de lumière.
 Et je me réjouis par un élan de foi.
 Qu'en Dieu tout bien se trouve, et le néant en moi.
 Laissez-moi mon néant, jouissez de votre être,
 Seigneur, tout mon repos est de me bien connaître.
 Vous n'êtes que grandeur, que gloire et que bonté, et moi rien par nature, et rien de
 volonté.
 A vous seul tout hommage, à vous seul toute gloire,
 Et moi de mon néant, je chéris la mémoire.
 Dieu, vivez dans vous-même, et moi dans mon néant.
 Que je sois toujours bas, et mon Dieu toujours grand (...)

神の虚無の愛

私の中心は虚無であり、ここは真の平和の地です。

ここには偽りや誤りは見つけられません。私が何も望まない時、敵は退きます。何処で
 私を捕まえたいのか、何を言えば良いのかもわかりません。理屈を並べ立てても、私は
 耳を傾けません。私の感覚が満足されても、謙虚でいられる事を知っています。

なんとこの虚無は美しいのでしょうか!

なんと甘く、静謐な事でしょうか。

この虚無には手段は無く、なんと私にはなにも良きものは無く、為すべき事に気づかせ
 ます。

なんと私には内なる力も支えも無く、なんと私の人間性すべては不安定な流れに過ぎま
 せん。だからこそ、神こそが私の唯一の助けであること。神が私に目を向けてくださる
 事は大きな恵みです。もしも、神が私に何も与えてくださらないのであれば、虚無が私
 の分です。祈りの時が過ぎても、私の内にはなんの欲望も思考も感じられません。もし
 も何かが私の元に訪れるのなら、それは神の意思の印です。こうして私は神の恵みと自

分の無価値さを痛感します。

私の虚無は魅力と光の場所となって、信仰の高まりとともに喜び、私の虚無のままに委ね、あなたの存在を享受します。

神様、私の休息は自分をよく知る事です。

あなたはただ壮大で、ただひたすらに栄光にあり、ただ善きもので、私は生まれながらに無であり、意思によって無になります。あなたにすべての敬意を捧げて、あなたのみ栄光を捧げます。そして、私はこの虚無の記憶を大切にしています。

神よ、あなた自身の中に生きて、私は虚無の中に生きます。

どうか、私はいつも低く、私の神はいつも偉大です。

フランソワ・マラヴァルの詩を読んで心に覚えた事 フランソワ・マラヴァルに自分自分を重ねて 終わりに

目が見えないという事は、呼吸をしているのかしていないのか、わからなくなってしまう事と似ています。9歳より、樹木、人々、鳥達、または祈祷書の鮮やかな絵文字の輪郭のみおぼろげに見えて、いかに音と声は心に光を与えてくれる事か。

薄暗い光が、窓を開ける事で顔一面に暖かな橙色に包まれてゆく。

鮮やかな寝室に、繊細に壁を反響してゆく午前5時の時を打つ音。さやさやと優しい葉が頬を打って、香しい初夏の花びらが髪に散ってゆく。鮮やかな色は見えないけれども、鳥の鳴き声を聴き、今日も朝の訪れを告げる。今、こうして生きている事に神に感謝する。筆を持つ事は出来ないけれども、滑らかな紙に指を滑らしてゆき、私が想う事、この祈りを声にして貴方に託して、聴かせ綴ってもらいたいです。この一言一言の祈りがいかに私の心の苦しみ、悲しみ、嘆きをなだめてゆく事か。

祈りには長い言葉など必要なく、短い言葉ですべてが足りてしまう。

神よ、私を憐れみたまえ。

本当に神の御心は、純粹で、静かで、自由に話し、考える意思をも失わせて、ようやく、魂で話す事が出来るようになります。そして私の眼差しは神の愛を求める事が出来ます。この事が、虚無という事でしょうか。

ただ静かで、輝いて、善きもので、少しずつ溢れでてくるものが、祈りと結ばれますように。

2026年3月3日 フランス アンジェ

平和 祈

フランソワ・マラヴァルの神秘詩についての紹介 François Malaval (1627-1719)

著 者 小泉友美 Koizumi Tomomi

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
